

新キエルケゴール研究創刊号

キエルケゴール協会

二〇〇二年二月

大衆メディア批判者としてのキエルケゴール

江口 聡

はじめに

有名なコルサー事件と、それに続く著作『二つの時代』で見られるように、キエルケゴールは大衆社会と大衆メディアの愚劣さを痛烈に批判した初期の哲学者の一人であると言える。そもそも、彼はその著作活動の最初期から晩年に至るまで、まずは自覚的かつ反省的なメディア利用者であり、メディア批判者だったのである。本発表では、彼のメディア批判のポイントとなる初期の著作活動と、有名な「コルサー事件」とその直後の著作である『二つの時代 文学批評』と関連する日誌記述を取りあげ、彼の批判のポイントを探り、最後にキエルケゴールの倫理思想全体に及ぼした影響を考えたい。

一 学生時代のキエルケゴール 自由言論運動への反発

キエルケゴール最晩年の『我が著作活動について』(一八五二)および死後に出版された『我が著作活動への視点』(一八五九)では、彼の著作活動は『あれかこれか』(一八四三)から始まるとされている。しかし、それ以前にもキエルケゴールは『未だ生ける者の手記から』(一八三八)や

『皮肉の概念』(一八四二)を出版していた。

しかし、彼が始めて著述家として姿を現わしたのは、彼がコペンハーゲン大学の学生であった一八三五年(キエルケゴール二二歳)に、学生クラブで行なわれた「我が国のジャーナリズム文学」という題の講演であるとされる⁽¹⁾。

彼の青年期は、デンマークの民主化の流れの上で、検閲を廃止し、匿名記事を書く権利を求める運動が隆盛であり、また同時に、低俗で悪質なメディアが社会的な問題とされはじめた時期であった。この流れのなかで、コペンハーゲン大学の学生たちの間でこの自由言論についての議論が盛んになった。

キエルケゴールに先だって、キエルケゴールの先輩オスターマンによって自由言論を擁護する講演が行なわれている⁽²⁾。彼の講演の大筋は、次のようなものである。たしかに新聞等の大衆メディアは往々にして低俗であることは認められるものの、新聞は、(1)それを読むことによって民衆の知的な向上を促進し、(2)権力をもたない大衆の利益を代弁し、(3)政府等の誤りを指摘し正し、(4)情報の自由な流通によって、人々はより正直で開放的になる。そのため、言論の自由はより大きな善のため有益であるというものであった。オスターマンは当時のデンマークでは穏健なりべラルの立場に立っていたと言っただろう。オスターマンの若さと、この講演がJ・S・ミルの『自由論』の三〇年前に行なわれたことを考えれば、当時としては優れたものと見なすべきであろうと思われる。これに対してキエルケゴールが行なった講演(EPW 35.52)は首尾一貫してオスターマンの表現や論理の甘さを攻撃するという非常に論争的な形式のものであった。

キエルケゴールの講演の趣旨を簡単に見ておく。(1)オスターマンが称揚するジャーナリズム文学

は、ほんの少数の有能な人々と大多数の無能な人間によって作られているにすぎず、(2)当時のデンマークの自由化運動にジャーナリズムは実際にはほとんど関与しておらず、むしろフレデリックⅨ世が主導したものであった、(3)舶来の思想をそのままデンマークに持ち込むことは飛躍であり、漸進的な進歩をばむ、そして、(4)匿名性が責任をあいまいにし、情報の真正さを阻害する、といった言論の自由運動に対抗する議論を展開したのである。

しかしながら、批判を受けたオスターマンは、キエルケゴールが知的ではあるものの、政治そのものにはほとんど関心がないことを知っており、実際には講演を真面目には聞かなかったという(EPW 201)。我々の目から見れば、このキエルケゴールの講演は、オスターマンの講演に比べて冗長で不明瞭であり難解であることを差しひいても、明らかに不十分なものであると言わざるを得ない。オスターマンの議論が自由な言論の中・長期の効用等を十分考慮したものであるのに対して、キエルケゴールの見解は短期的であり、また十分に考察されているとは言えない。キエルケゴールの(1)の点は、オスターマンらの立場に立つものにとっては重要な点ではないと言える。たしかにほんの少数の人間のみが新しい有用な知見を生み出すことができるとしても、その少数の人間が十分にその力を発揮できるような状況を生み出すためには、より多くの人々が討議に参加する必要がある。(2)の点は歴史的な影響関係にかかわるため、ここで議論することはできないが、(3)の点については、それが舶来のものであるかどうかは、その思想の有用性とは直接の関係はなく、また(4)は当時の絶対王政のもとでは自由に政治的意見を述べるためには匿名が必要であったこと、また、誤った情報は反対弁論によって正すことが望ましいことなどが、即座に思いつかぶことだろう。そしてまた、自由言論についてのキエルケゴールの実質的な主張の論拠は(4)の点だけであり、

他はすべてオスターマンの議論を検討しているに過ぎないことが気づかれる。

このようにキエルケゴールの講演には実質的な政治的主張はほとんど含まれていなかったため、オスターマンの講演が民衆の好評によって迎えられ翌年はじめにほぼそのまま新聞に再掲されたのに対して、キエルケゴールの講演はジャーナリズムからは無視されることになった。

この講演の翌年にも、キエルケゴールはコペンハーゲン・ポスト紙での自由弁論擁護の特集記事に反応し、『コペンハーゲン・リニューヴェネ・ポスト』紙に「B」という匿名記事を投稿した。自由化運動の指導者であったヨハネス・ハーグやオルラ・レーマンに新聞上で論戦を挑むが、その議論の内容は、これもまた主としてレーマンらのレトリックに対する攻撃にとどまり、実質的な議論が行なわれたとは言いがたい(BPW 6-34)⁽³⁾。

二 若きキエルケゴールは大衆メディアに何を期待したか

これらのキエルケゴールの初期の活動は、何を意味するのだろうか。まず指摘しておかねばならないのは、この時期のキエルケゴールは、文学的な野心を抱く(少なくとも他の人々にとって)は()ありふれた青年でしかなかったということである。功名心に燃えた若きキエルケゴールはこれらの論争を通して、自分の名前を売り、才能を見せつけようとしたのだと見るのは不自然ではないだろう。実際、論敵の一人であったヨハネス・ハーグは、キエルケゴールの攻撃に対して、次のように皮肉を込めて述べている。

コペンハーゲン・ポスト紙の編集者を知るひとは、彼の取材の熱意と、それを編集する

勤勉さ、高度な選別能力と、真理に対する尊敬の念を否定することはないだろう。真理への愛ではなく、ささいな自分の自己なるものほめそやすためにのみ使われるようなのみ使われる機知や弁証法の技能などより、われわれはこのような性質を尊ぶのである。(EPW 144)

青年期のキエルケゴールがこのような傾向をもっていたことは、二つの論争にあらわれる議論の方法に表われている。キエルケゴールはなにか実質的な主張を行なおうとするよりは、文学的なレトリックを多用し、論争相手の主張をくつがえすことになつきになっているように見える。しかし、この時期のキエルケゴールが、成立期の大衆メディアに対して期待をも抱いていたことは、これらの論争の端々に見ることは不可能ではない。キエルケゴールの攻撃の中心は、一貫して、論争相手の曖昧な概念とレトリック、そして大衆新聞の表現の粗野さと匿名記事の無責任な態度にあった。キエルケゴールの攻撃は大衆メディア全体に向けられたものではない。

『祖国』では、我々はよろこばしい現象に出会います。『祖国』はダヴィッズ教授の訴訟で暴風を受けましたが、その後、若々しい力で立ちあがり、その後の時期には、力強く健康な存在を勝ちえました。『祖国』は、自らが運動していくその方向を見出したようです。…われわれは、言論出版の自由について警鐘を鳴す前に、なによりもまず、そこから何を得ているのかを、もう少し注意深く検討すべきこと学びます。(EPW

キエルケゴールはオスターマンやレーマンのように、新聞の匿名記事を政治的な権威としようと
する動きに対して警戒的だったのだが、『祖国』紙のような穏健で実名によって記事を書くことを
原則とする新聞に関しては、キエルケゴールはよき新聞読者であり、活発な投稿家であった。キエ
ルケゴールは、新聞は大眾を正しく啓蒙するメディアとして非常に有効であることは十分に認めて
いたのであり、またこれ以降も彼は多くの（そしてその多くの場合論争的な）新聞記事投稿を試み
ることになる。

三 コルサー事件

上の論争の後、キエルケゴールは本格的な文学批評活動と修士論文を開始する。彼の計画では、
一八四二年の『あれかこれか』からはじまる哲学的著作群の執筆活動は、一八四六年の『哲学的
断片への結びの学問外れな後書』によって終える予定だったとされる。しかし、一八四六年の大眾
ゴシップ新聞コルサー紙との衝突の経験を通し、著作活動を継続することになる。それまでの主流
新聞であった『祖国』や『コペンハーゲン・ポスト』に比して、『コルサー』紙は、意識的に低俗
であろうとした最初のイエロージャーナリズムであった。ゴールシュミットが編集者として名を挙
げていたが、その記事の多くは匿名によるものであった。青年期のキエルケゴールが盛んに攻撃し
た悪質なメディアの極を目指したものであったのである。

さて、このコルサー事件は、一般的には、彼が卑劣で悪意あるゴシップ紙の一方的な誹謗中傷の
犠牲者となったものとされてきた。例えば梶田啓三郎は次のように記述する。

一八四五年二月も終りごろ、『デア』と題する美学年報がP・L・メラアの編集で出版されたが、そこにメラアは「ソレー訪問」という論文を発表し、そのなかでキルケゴールの『人生航路の諸段階』の第三部「責めありや なしや」を取りあげて、酷評を加えた。かつて学生時代の友であったメラアが、批評のあいしよつとなる書物をろくろく読みもしないで無責任きわまる軽率な批評を加えたばかりか、書評という口実のもとに、「花嫁を拷問台に載せて実験し、生きた肉体を解剖し、彼女の魂を小さくみに苦しめた」などと、人身攻撃をしている卑劣な態度に、キルケゴールは憤慨せずにはいらなかった。⁽⁴⁾

そして、キエルケゴールは「遍歴美学者の活動 どうして彼が酒宴の支払いをすることになったか」を『祖国』紙に発表し、メラアの文章の瑕疵を非難した上で、次のようにしてメラアがコルサー紙にかかわっていたことを暴露し、さらにコルサー紙を挑発した。この結果、メラアはコペンハーゲン大学の教授職につくことを妨げられることになり、やがて悲惨な人生を送ることになる。その報復として、『コルサー』紙はキエルケゴールを嘲笑する個人攻撃を加え、キエルケゴールは大きなダメージを負うことになった、とされる。

しかし、事実はそれほど簡単なものではない。キエルケゴールの一八三〇 四〇年代の日誌にはメラアについての言及がまったく存在せず、また『祖国』紙上での反撃についての反省もほとんど含まれていない。このような事実から、キエルケゴールはこの件について日誌に記述することをはばかったか、あるいは、後にそれを廃棄したと推測することもできる。

実際のところ、メラアの批評⁽⁵⁾を読めば、それはたしかに辛辣ではあるかもしれないが、悪名高

いコルサー紙がよく行なったような人身攻撃を含むものではないように見える。むしろ、キエルケゴールが自作への作品批評を一部誤読した上で過剰に反応し、メラーに対して不当な攻撃を行なったことからこの事件は始まったとも言わざるを得ない。また「コペンハーゲン中の人々が彼を嘲笑し、友人たちは彼を無視した」というよくある伝記での記述は彼の日誌以外にはほとんど証拠がない。彼の過剰な自意識を示すものかもしれない。例えばロジャー・プール⁽⁶⁾は、キエルケゴールは、実生活において、機知と才能に富み、社交にもたけたメラーを、彼自身の理想像として捉えており、彼に作品を批判されたことよってなおさら深く傷つき、その結果、メラーの批評に過剰に反応したのだらうと推測している。

いずれにしても、コルサー事件は単純なものではない。むしろ、初期の大衆メディアに対応する不幸な失敗例として再検討する余地があり、より詳細な研究が必要とされると思われる。

四 大衆メディア批判

さて、このようなコルサー体験は、キエルケゴールになにをもたらしたのだろうか。

先に見た青年期のキエルケゴールの大衆メディアに対する関心は、その後の『あれか「これか」』（一八四二）以降の著作活動には直接には反映されていなかった。しかし、一八四六年に『哲学的断片への結びの学問外れな後書』までの一連の執筆活動が一段落したところで、コルサー事件の経験と並行する形で、彼はギーレンボルグ夫人の小説『二つの時代』を題材とした批評を書き、その後半部分に、文学批評以上の分量で社会批判を展開するのである。この著作によってキエルケゴール

ルは、情熱と内面性の欠如、直接的関心を離れた傍観的思考の無益さ、反省過多、匿名性・無名性の無責任さ、大衆による水平化、マニュアル化、専門性の軽視などの害悪を鋭く指摘し、現代に至る大衆社会批判・大衆メディア批判の一つの雛型を作りあげた。ここで、簡単にコルサー事件以降のキエルケゴールの大衆メディア批判の要点を見ておくことにしよう。

まず、キエルケゴールによれば、現代社会は、傑出した個人を、妬みによる「水平化」によって窒息させ、その活動を妨害してしまう。「暴虐的な、水平化する現代の世界は、常にあらゆるものを均質にしようとする。したがって、すべての人は単なるグループの一員、ひとつの典型になっ

てしまう。」(JP 2:2061)⁽⁷⁾

そして、この水平化を引き起こすのは「公衆 Publikum」という幻影の怪物である。「公衆は一つの国民ではなく、一つの世代ではなく、一つの同時代人ではなく、ひとつの教区ではなく、一つの共同体ではなく、ひとつの特別な人達ではない、なぜなら、すべてそのようなものは具体性によってのみそれがあるところのものだから。実際、公衆に属する者は唯一人としてそのようなものと本質的な関わり (wesentlich Engagement) を持っていない。」(SV 14, 67)⁽⁸⁾「この時代には、他とはつきり区別できる個々の人間を見つけだすのは難しい、というのは、人間が一つの抽象に変えられることによって、同じように見えるようにされてしまっているからだ。」(JP 2:1967, 3:2964)「群衆はまさにその概念からして非真理である。というのは、それは個人を完全に悔い改めることなく、無責任にするからだ。あるいは、すくなくとも、個人を断片にすることによって、その責任の感覚を弱めてしまっからだ。」(JP 3:2952)」

そして、このような無責任な「公衆」をつくりだすのは、公衆の下僕でもある大衆メディアその

ものである。『二つの時代』とそれに続く日誌の記述で、キエルケゴールは大量のメディア批判を行なう。一部を取りあげてみよう。

「まったく似ていない人々が、一人の人についておしゃべりする（JP 2:2156）」、「それぞれの世代において、新聞のような途方もない道具を使うことが正当なほど才能があり成熟した人々はほんの少ししかない。しかし、ほとんど誰もが、そんなコミュニケーションの道具を使うとは——ナンセンス以外には伝えるものもないというのに——なんと不釣り合いなことか！」（JP 2:2150）」

新聞における匿名性は、個人であることの意義を失なわせる。「匿名性は現今において、ひとが恐らく考えているよりもずっと意味深長な意義をもっている：人は匿名で書くのみならず、人は名前を書名して匿名で書く、否、人は匿名で語る。：：現今人は実際に人々と話すことができる、しかも人の言わざるを得ないことは、彼らの言表は極めて分別があるのに、対話は人が匿名と語っているかのような印象を与えるのである。（SV 14, 70）」

また新聞は、個人の私的領域に侵入し、その生活を破壊する。「新聞の流通によって、自分の個人的なことが大評判になることに耐えられる人はほとんどいない。（JP 2:2173）」

そして、また、本来の意味では関心をもちたいことがらについての情報を与え、無駄口をたたかせる。「新聞は、多数の人間に届くだけでなく、なにもかにもを扱うことによって、その影響の領域を広げる。しかし実際には、この「なにもかにも」は人々の生活にはほとんど意義を持たないものである。（JP 2:2145）」

また、新聞記事の匿名性は、無責任に虚偽や単なる噂を流通させる。「しかし、誰でもないような誰か（したがってなんの責任ももたない）が、責任のことを考えることなく、このコミュニケー

シヨンの恐ろしく不釣合いな手段によって、いかなる誤謬をも流通させることができるということ
は恐ろしいことだ。(JP 2:2152)

情報を流通させることによつて、専門性や熟練を軽視する結果を招き、また、個人性を失なわ
せてしまう。「ドイツでは恋人達のための手引書すらある、それゆえしまいには愛するカツプルは
座つておたがいに匿名で語ることになる。あらゆることに人は手引書を持ち、そして一般に教育は
やがて、そのような手引書の持つている観察の多少とも概要を完全にものにしてに存す
るようになる、そして人はあたかも植字工が活字をとりだすように、個々の事柄をとりだす熟練に
比例してすぐれているといふことになる。(SV 14, 71)」

このようなキエルケゴールの当時の社会と新聞に対する批判は、情報テクノロジーの広汎な普及
を見た現代においてもなお妥当するものと言えるだろう。のちに、キエルケゴールは「すべての
人類の発明（鉄道、電信など）はおしゃべりを発展させ助長させる傾向がある。」(P 44233)「世
の流れは、たえずコミュニケーションの手段を完成させる方向にすすんでおり、したがつて、ナン
センスのコミュニケーションはますます流通する。」と日誌で述べる。実際のところ、我々が二〇
世紀にラジオ、映画、テレビ、そして最近のインターネットに代表される新しいメディアを手に入
れ使いはじめるたびに、このような批判は重要な意義を持っている。むしろ、現代に至る各種のマ
スメディア批判の原型を作りあげたと言つてもよいだろう。

五 公開的なものとしての倫理的なものの再考

彼がコルサー事件から得たものはこれだけではない。彼が事件以前自明とみなしていた「倫理的であることは公開的であることである」という主張をほぼ撤回することになったという彼の思想上の転回点でもあった。

コルサー以前の哲学的著作である『あれか「これか」』『恐れとおののき』、『人生航路の諸段階』などでのキエルケゴールは、倫理的なものの特徴としては「公開的であること aabenbar」を最も重要であると感じていた。『あれか「これか」』で倫理的立場を代表すると言われる判事ヴァイルヘルムは次のようにして、審美家Aに公開的であることを勧めた。

「誠実、卒真、明らかであること (Aabenbarlse)、理解、これが結婚生活における生命原理であって、それなしには結婚生活は美しくなく、また本来非倫理的である。」(SV 3, 111)

『恐れとおののき』の「問題III」の冒頭でも、次のように言われている。

倫理的なものは、倫理的なものであるかぎり、普遍的 (det Almene) なものであり、普遍的なものであるかぎり、それはまた公開的 (aabenbare) なものである。個別者 (den Enkelte) は、直接的に感覚的・心的なものとして規程せられる、隠されたものである。そこで、その隠れた状態から抜け出して、普遍的なものにおいて公開的になることが、個別者の倫理的課題となる。だから、彼が隠れたままではいようとするならば、そのた

びに彼は罪を犯し、試誘におちいつているのであり、みずからをあらわにすることに
よつてのみ、彼は試誘から抜けだすことができるのである。

これらの立場にもとづいて、『あれか＝これか』でのもう一方の主人公Aは、自己の内面を秘密にすることによって、美的段階に留まるとされ、倫理家ヴィルヘルムから批判されることになる。また、信仰の父であるアブラハムさえ、彼のイサクを殺そうという意図を、周囲の人々に語らなかつたため、倫理的に非とされねばならないとされたのである。ここで注意すべきなのは、キエルケゴールにとつて問題であつたのは、倫理的なものの要請の焦点を、公開的であるべしという命令と解釈していたため、審美家Aの生活も、信仰の父アブラハムの行為も倫理的には非とされねばならない、という点にある。

しかし、それでは、我々は倫理的であるためには、他人に語ることでできない内的生活を営むことはできないのであろうか。我々の多くにとつては、『あれか＝これか』での倫理家ヴィルヘルム判事は、魅力のない俗物でしかないだろうし、また、単に審美家Aに美的な魅力を感じるだけでなく、Aがヴィルヘルムが見つけれられない重要ななかに気づいていると感じる読者は多いだろう。また、『恐れとおののき』での悲劇的英雄の代表であるアガメムノンが魅力ある英雄に見えるのは、まさに自分の意図をイピゲネイアに隠そうとし、そのことを彼自身苦しんだからである。もし自身自身のなにもかにもを誰にでも語ることでできる人物を我々が見るとしたら、我々はその人を底の浅い人間と見做すのではないだろうか。我々はあまりに素直で卒直な人間を、独立した一人の個人だとは見なさないだろうし、また、自分自身だけが知る秘密と、孤独と孤立を感じる時間を持つことがなければ、我々は自分を自分であると感じることはできないだろう。ここに前期キエルケゴール

ルの問題があることが感じとられる。

当然のことながら、キエルケゴールは隠れや沈黙が我々の生活にとって本質的に重要であることを意識していた。

倫理学が顕現を要求する厳密さにも関わらず、隠れと沈黙は人間を偉大にするのものであることは否定できない。というのは、隠れと沈黙は内面性の規定だからである。(SV 5, 67)

しかし、前期のキエルケゴールの著作では、沈黙は危険である。

倫理学のお気にいりである悲劇的英雄は、純粹に人間的である。私は彼を理解することができ、そして彼の意図はまったく明らかである。もし私が先に進めば、私は常に、神的なものと悪魔的なものという逆説につきあたる。というのは、沈黙はその両方だからである。沈黙は悪魔の罠であり、悪魔が沈黙させられればそれだけ、それはより恐ろしいものとなる。しかし、沈黙は神と個別の人間との相互理解でもある。(SV 5, 67)

倫理的なものは公開的であるとする初期のキエルケゴールにとって、我々は、隠れ、沈黙を守ることによって、美的な領域にとどまるか、あるいは他に明らかになり倫理的領域に生きるか、そしてさらには、ふたたび隠れ、宗教的な領域に生きるのかという選択を迫られている。この、個人であることにおける秘密や内面性の重要性の認識と、「公開的なもの」としての倫理との対立が、キエルケゴールの前期著作の独特の緊張感を形成しているのである。

キエルケゴールにとっての問題は、なんらかの特殊な状況では、我々は自分の行為の理由を他人に伝えることができないことがあるということ、あるいはそれを他人に伝えたとしても、他人に理解されない場合があるということであった。『恐れとおのき』でのアブラハムについて、キエルケゴールは次のように語る。

アブラハムは沈黙を守る——しかし彼は語るができないのである。この点に、苦悩と不安がある、すなわち、私が、語ることによつて、私を人に理解させることができないとき、たとえ私が明けても暮れても間断なく語つたにしても、私は語つていないのではない、これがアブラハムの場合なのである。彼は語るができる、しかし一つのことを彼は語ることができない、そして、もし彼がそれを語ることができなければ——つまり、他人がそれを理解するような形で語ることができなければ——その場合彼は語つてゐるのではない。(SV 5, 47)。

実際のところ、アブラハムのような特殊な状況に置かれた場合、自分の行為を正当であると確信してゐたとしても、それを他人に理解してもらつことは非常に困難である。もし自分の意図を語つても、それが他の人々に十分に理解されないような特殊な場合に、その本人の行動は非難されるべきだろうか。このようなことが生じえるのはアブラハムのような宗教的な場合だけではないだろつ。

ところが、後期の傑作である『死に至る病』や『キリスト教的講話』では、もはや倫理的なものは公開的であるとする初期の見解は、ほぼ捨てざられてゐる。むしろ、『恐れとおのき』で見ら

れたような倫理的なものと宗教的なもの一見しての対立は捨てられ、かわりに「倫理」宗教的なもの」の概念がとりあげられる。そしてその特徴は、それが微行 *in cogitatio* とその模倣として見られることになる。外面性と内面性の不一致こそ、その人物の精神の段階と絶望の深さ（そして救い（あるいは人間の本来的なありかた）への近さ／遠さ）を表わすものとされ、沈黙の概念の扱いも変化する。たとえば、『二つの時代』からの文章を取りあげよう。

本質的に沈黙を守ることができる人のみが本質的に語ることができるのであり、本質的に行為することができる。沈黙は内面性である。(SV 14, 77)

作家というものも、もちろん、ほかのすべての人間と同じように、自己の私的な人格性をもっていなければならないが、この私的な人格性は、作家が余人の立ち入りを許さぬ「至聖所」としておかなくてはならないものである。…沈黙はここでもまた、人間と人間とのあいだの教養ある交際の条件なのである。(SV 14, 78)

このようなフレーズでは、キエルケゴールは明らかに沈黙することの意義を十分に意識している。もはや『あれか』これか』や『恐れとおののき』で見られるようなためらいは捨て、沈黙と秘密を肯定的に評価していると考えられる。

ここで我々はキエルケゴールの思想の転換の理由を推測することができる。コルサー事件のうち、もはやキエルケゴールは、倫理的であるために、大衆メディアによって作りあげられた愚昧な公衆に向ってなにかを説明すべき必要があるとは考えない。もはや、キエルケゴールがそれ以前に信じこんでいた公開性は、個を喪失し、誰もが無関心・無責任である大衆社会では意味をなさない

のである。むしろ我々は、本来的な倫理的行為者であるためには、のべつナンセンスなおしゃべりをくりかえしている「公衆」に背を向け、内面性を保持することを要求されるのである。

六 キェルケゴールのメディア批判の評価に向けて

最後に、彼の公開的なものとしての倫理的なものの概念を、最近の議論から再評価する試みを示唆しておきたい。

『あれか「これか」や「恐れとおののき」での「倫理的なもの」の要求は厳しすぎ、また、私的な内面生活といったものの重要性を捨象してしまっている。この問題は、前期のキェルケゴールが公開と隠れ、私的と公的といったあまりに単純な二分法に依存していたためであると推測することができるのではないだろうか。

ここで簡単に二十世紀の哲学者たちによる個人のプライバシーに関する議論を見てみたい。コミュニケーションメディアが発展するにともおない、メディアとプライバシーに関する問題は、哲学の主要な問題となり、特になぜプライバシーが重要であるかという問題は非常によく議論された。そのなかでも、ここでは親密性理論と呼ばれる議論に注目してみたい。チャールズ・フリードは、我々がプライバシーや内面の秘密といったものが必要なのは、単に自律のためだけでなく、他の人々と、特別に親密な関係を維持するためであると指摘した。またジエームズ・レイチエルスは、多様な人々との多様な関係を持つために秘密とプライバシーが必要であるとした。親密な関係は排他的である必要があり、また親密な相手に対して特権を与えるためにある種の秘密が必要とさ

れるのである。彼らにとっては、我々の内面生活と秘密は、非倫理的であるどころか、親密で多様な人間関係を維持するための必須の手段なのである。このタイプの議論で特徴的なのは、内面性の開示を人間関係に相対的なものと見なすという点である。筆者はこれがキエルケゴールが彼の思想および著作活動、そして彼自身の生涯における苦闘のなかで必要としていたものではないかと想像している。

また、キエルケゴールのコミュニケーションの観念はあまりにも偏狭であったのかもしれない。青年期から晩年に至るまで、キエルケゴールにとって「コミュニケーション」は、一方が他方に何かを伝える一方的な伝達でしかなかった疑いがある。コミュニケーションの問題は、典型的には『哲学的断片』でのように、「教師と弟子」の関係として捉えられてしまっている。キエルケゴールの功績は、そのコミュニケーションにおいて伝えられる情報は、知識だけでなく能力でもありうるということを取扱ったことにある。しかし、キエルケゴールの場合、このコミュニケーションは双方向の情報交換でもなければ、コミュニケーションそのものに価値があると見做すわけでもない。つまり、キエルケゴールにとって、メディアとコミュニケーションは単なる手段でしかなかったのである。ここにキエルケゴールの限界があるかもしれない。もはや我々にとってはすでに各種のメディアは生活そのものであり、それを抜きにして本当の自己といったものが探しだせるとは思えない。

先に見たようなキエルケゴールの大眾社会批判・メディア批判は、現代でも度々とりあげられるトピックである。おそらく、キエルケゴールが最も後代の一般に対する影響力をもったのは、キリスト教信仰に関わる部分よりは、むしろこの領域であったかもしれない。電子メディアやコミュニ

ケーションだのといった話題が毎日のメディアに載る今日、我々は今一度キエルケゴールにたちかえって、メディアと(倫理的)コミュニケーションについて学びなおしてもよいだろう。伝統的な大衆メディア批判の原型であるキエルケゴールを掘りおこし、吟味批判することによって、我々はこのインターネット時代に対する批判の一手段を得ることができると思われる。

(本稿は二〇〇〇年五月五日、キエルケゴール協会春季講演会、および二〇〇〇年一月二二日関西倫理学会における研究発表内容を加筆整理したものである。)

(えぐちまこと)

注

(1)この講演が行なわれた一八三五年は、キエルケゴールの実存主義の出発点として有名なギーライエの手記「私がそのために生き、そして死にたいと思うようなイデーを発見することが必要なのだ」を残した年である―すなわち、彼が文学者・哲学者として自分を認識しはじめた時期であることに注意したい。

(2)J. A. Osterman による講演は「一八三五年一月一四日に行なわれ、新聞 *Fæderelandet*, 71, Jan. 22, 1986 に掲載された。『*Early Political Writings*』, ed. by Julia Watkin, Kierkegaard's Writing, I, Princeton University Press, 1990, pp.189-199, 以下 EPW とこのスペースを記す。

(3)これらのキエルケゴール学生時代の活動の多くを大谷愛人の労作『続キエルケゴール青年時代の研究』勁草書房一九六八で知ることができる。

(4)梶田啓三郎『キエルケゴールの生涯と著作活動』、中公世界の名著『キエルケゴール』

- (5) P. L. Møller, "A Visit in Sorø", in *Kierkegaard's Writing: The Corsair Affair*, Princeton University Press, 1982, pp. 96-104
- (6) Roger Poole, "Søren Kirkegaard and P. L. Møller: Erotic Space Shattered", in *International Kierkegaard Commentary: The Corsair Affair*, Mercer University Press, 1990
- (7) Howard V. Hong and Edna H. Hong (eds), *Søren Kierkegaard's Journals and Papers*, Indiana University Press, 1967-75. 下記 JP 参照。 韓国に邦訳あり。 参考。
- (8) *Søren Kierkegaard's Samlede Væker*, Gyldendata, 1964. 下記 SV 以下に巻頭を記す。『恐れとおのれ』および『二つの時代』（『現代の批判』）の邦訳は梅田啓三郎訳『キエルケゴール』中央公論社の中を参照してください。